
人の間の事の象（詩の集）

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人の中の事の象（詩の集）

【Nコード】

N2617Q

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

人間は人の「間」を介す。人間とは事象である。人の中は事を象る。

主要なテーマは、とらえどころのない事象の心象風景。昔、投稿したものとか

序：夜光虫のきらめく海岸線を歩む。（海の心象風景）（前書き）

「夜光虫」

海洋性の微生物。
プランクトン

大量発生すると夜に微かに青く輝いて見えるが、昼に見れば赤潮の色。

序：夜光虫のきらめく海岸線を歩む。（海の心象風景）

微かな淡青の標。

虹？鳥の尾羽をなびかせて。

闇の中に溶き、月光の衣をまとい、夕の暮す記憶の中に舞い、青空の根元で踊る。

悠久に、過す導。

うつろいは、生々世々。

長しなえに終わっている。

月影の唇はうたう。

時を葬る鎮魂歌。

うっ？

過去を取り戻せるならば、失われた時間は何色に輝くだろ

虹のような淡さは、砌を微かに刻む徴。

月光のように淡くつめたい彼は、煌く風のように現れて、七彩の霧に消える。

万有を縛る時でさえ、とらえることはかなわない微々たる印。

時を追う者は、流れの果てに存在し、そして、記した憶えに消えていく。

白銀の輝く時は、追いかけて。

紅玉の瞳は鋭く明かし、時を除き見る。

未来を映し出すのならば、まだ見ぬそれは何色に輝くだろ

うっ？

万物に平等に与えられる時でさえ、持つことを許されない。
現身に存在せず、森羅万象に存在しないもの。

微弱に生まれる命の中に。
消えていく光の耀きを忘れない。

現在を忘れないならば、それは虹霓色に輝いているだろう
か？

幾星霜の徴標は、微かにうたう。

時間は、永遠。

常しなえに全うする。

0の印刷機。(霧の心象風景)

森の木々が霧を生産する。

森で霧が生まれる。

樹が霧を吐き出す。

何もかも、覆い隠してく……

悲しい記憶、過酷な記憶。

霧深き森に霧捨てられた時計。

霧はだんだん白く濃くなっていき……

その時計に刻まれた時は、零に戻る。

視界の端で揺らめいている、輪郭の薄い黒の色。

いつだって足元にいる、そこにいるものは、いつも居る黒いもの。

あまりにも似ていた佇む影は、誰も気がつかない。

影だから。

居場所がないから、見えるだけ。

意識の中に残る残像を、空虚な心で何度も息絶えた。

居場所がないから、脳裏に繰り返す。

初めて呼ばれた名前を呼んで欲しい。

何者かわからない。

人に語ることの出来る記憶を持つ人がうらやましい。

霧の森から産まれた水が世界を廻り、再び戻ってくる年月と等しい年月。

その時計に刻まれた時と同じくらいの年月。

霧の森で少しづつ吸収した。

光があり闇があった。

生があり死があった。

音があり静寂があった。

霧から集めた雫。

天空から注ぐ幻影の光。

影などとは、光にも闇にも属す。

影は風景に溶け、

風が森に吹き抜けるたび、

静寂に誘われて、生命の種子を運んでくる。

草原に緑柱^{ベル}石色の波が生まれ、消え、生まれては広がっていく。

地上に放たれたほんの少しの記憶から作り出す、命の器。

眞実は変化に富む、変異体。 (形の心象風景)

記号は集い、消え行く構造。

ガラスを溶かした細工の美しい核のバラは花開き、廃れる。

弱いものは消えていく記憶。

強いものに吸収されていく象徴。

文明の歩んできた技術。

若い時間は集い、廃れた古さは昔に残り、消えていく。

文明が消え、受け継ぐものがない。

今に引き継がれていること、失われたこと。

意味を忘れて、記号としてしか残っていない。

神秘的な模様、不思議な造型。

知れば知るほど、分からない。

その意味を知る。

今は、もう、数少ない物質の構造体。

創・れきし・造（有の心象風景）（前書き）

宇宙の始まり方のひとつに「無のゆらぎ」の説があります。

この世界、宇宙に、物質があるのは、

無限にある可能性のひとつの結果、粒子と反粒子の数の違いの結果
のひとつ。

この世界に存在するものは、単なるひとときの、揺らぎに過ぎない
のかもしれない。

創・れきし・造（有の心象風景）

世界の始まりと終わりの間は、
揺らぎのようなもの。

霧に包まれて、赤い瞳が見ている、ため息。

右手の始まりのコトバ、原始と終焉のハザマの扉。

左手に終わりのコトバ、時と刻のハザマの鍵。

無のため息は、霧となり、揺らぎを生む。

創。

それぞれの世界にクサビを打ち……

ただ、あるモノ。

そこにあつた因子。

ただそれだけのコト。

陽の因子と、陰の因子は、

無に揺らぎを起こし、有の世界は、急速に膨らみはじけた。

無は、コントンになり、

光と闇、生と死、天と地、陽と陰は対となり、消滅する。

残ったのは、物質だった。

ただ、そこにあつて、あるだけ、

ただ、ただ、ゆらいで、そこにあつた。

今まで全ての事象を見ている。

എഴുത്തുകാർക്കും വായനക്കാർക്കും

創・れきし・造（有の心象風景）（後書き）

神話や伝説は、宇宙や生命の始まりのことや歴史を、
代々残せるように、工夫された暗号だと、心のどこかで、思っ
ています。

そう、信じていたい。

「ビックバンがどうのこうのので宇宙が膨らんだ」とか「粒子と反粒
子が出会うと光を放つ」と堅苦しく論ずるよりも、

神が「光あれ」と言ったら、世界ができたと言った方が、用語的に
も、感覚的に、覚えやすいもの。

微笑む瑪瑙（石の心象風景）（前書き）

- 瑪瑙の瑙は、脳の様、脳の紋 -

瑪瑙の名前は、石の外観が馬の脳に似ているためつけられた。

メノウは、歪んだ骨の夢を見る。クルクルと狂ったようなメノウの夢。カラカラ笑うメノウが見た世界。ちよつとホラーな雰囲気のと瑪瑙の意味不明な言葉遊びのシ。詩。

微笑む瑪瑙（石の心象風景）

歪んだ骨を拾う微笑む（まどろむ）夢を見て、
錆びついた唄を謡う。

からから、からから、シャレコウベ。

こつべを垂れた、首飾り。

瑪瑙めのつの斑目まだらめ、駁まだらだら。

首飾り、くるくるり。

首にかけて、首飾り。

からから、からから、笑むコウベ。

螺旋階段昇り降り。

太陽と月の舞踏会。

回って廻って、巡りゆく。

月明かりに。

歪んだ骨が浮かび。

欠けていく、月日に。

空は、淀み、

海は、曇る。

メノウの駁は鮮やかに。

首飾りは、かりました。

からから、からから。

狩りました。

浅い境目を深淵しんえんに。

深く刻んで、とうせんぼ。

くるくる巡ってふりだし入り口。

歯車回って、こわいこわい音をたてる。

交差点で分かれ道。

矢印、目印、道標みちしるべ。

境界線を引きずって。

からから回り。

瑪瑙の斑目くるくるり。

環っかに通して。

首かける。

めのうは奥深く。

掘り起こして。

刈りめぐらせば。

永遠の輝き。

想起に見る夢。(念の心象風景)

吹きぬける風は、まるで昔話をするように、身体の奥深くまで、伝わってくる。

暖炉の色に染まった家の中。
知っている。

これは、遠い昔のキオクの色。

すべては、幻覚でできている。

風に揺られて、再び意識は、吸い込まれた。

いつれは、このはかない記憶も、過ぎした日々も消滅してしまうのだらう。

永遠というものが無いように、自身の存在があやふやである限り、己は幻というまどろみの中で、1日1日死んでいく。
成長する^{みじい}ことを拒み、しかし、身体はゆっくりと成長する。

再び、瞳を閉じる。

体はゆっくり死へ向かって成長している。

シテイシープの迷い道。(義の心象風景)

人間は所有すると言う概念がある。

そこに所有しているものを盗むと言う概念が生まれる。
奪われることへ対しての恐怖が生まれる。

奪うだけならば、動物にだってできる。

動物は所有と言う概念は無い。

自分が手に入れたものが奪われれば、落胆こそすれ、
それは自分が手に入れられなかっただけの事に過ぎない。

未来のことを想像できる人間は、命を持っていることを知っている。
奪われることへ対しての恐怖、失う恐怖を知っている。

殺し殺され、他人に、病に、事故に、寿命に奪われている。

盗んではいけないこと、殺してはいけないこと。

人間だけが考える。

未来のことを想像できて、所有することを知っているがゆえに。
概念的に？

エシックスとモラル
行動規範的動機の霧の中。

ストレイシーブ
迷える羊は、迷っている。

どこに続くとも知らぬ都市の路上で。
シティローダ

シテイシープの迷い道。(義の心象風景)(後書き)

モラルは、経験や育ってきた環境による結果。教訓、道徳、個人の素行。良し悪しは、フィードバックで感じる。

エシックスは、社会的通念に照らして公正な他人への態度・行動すべき事・すべきでない事を分ける行動規範。

とある場所では、肉(牛とか豚)を食べることはモラルに反するが、それらの肉を食べること自体はエシックスには反さない……たぶん、そんな感じだと思う。

循環輪は廻る。(魂の心象風景)

何故ここにいるのだろうか？

気がつくくと空が見えた。

満月の夜、月明かりは社会を一樣に染め付けている。

起き上がれない。

いや、そうではない。起き上がらないのだ。

自分から、高さが消えた

視覚は3次元を認識しているのに、体表は地面の表面にくっついていてる。

眠らない街、

電飾は艶やかあでやかかで装飾だけが、浮かび上がる。

じみくず、

くさむら、

車の影をすり抜けて、何をするでもなく静かな街をさまよう。

何のために、さまよふのだろうか？

何のために、うまれたのだろうか？

何のために、ここに居るのだろうか？

なんのために？

どこにも存在がなくなった時から、どれくらい経つのだろう。

容を保つのもむずかしい身体。

体は当の昔に、どこかに忘れてきた。

何人もの死を見、意識は死ぬことのできない不死の病。

不治ではない。永遠に生きていかなくはならない呪。

人との関係を絶って、もう何代もの時代が変わった。

しかし、時として、人とのふれあいが欲しくなる時がある……

時が止まったように世界から孤立している。

全てが時を戻す。

はじまりのときへ。

そして、別の未来へ。

再生と消滅を繰り返す、刻の呪い。

永遠に彷徨の時期をさまよう。

空箱に捨てられて、その影はただ見ているだけ。

星球の天体観測。(宙の心象風景)

星は宙に浮かぶ1つの命。

大なり小なり連なって、

まるで生物のように生まれては消えていく灯。

宇宙に散らばり1つ1つの細胞のように微生物のように、
すべてはそこに、有形し、

皆も、銀河を作り宇宙を創造する。

漂う、揺れる、形作る。

集う、そして、散る。

幾億年の結晶に形を変えて息づいた、

星球に泳ぐ小さな流星物質。メテオロイド

物質の塵の舞う粒子の中、短い命は燃え尽きる。

水槽の微塵子たち、どこまでも浮遊する星の屑。ミクロン

すべてはここに、形象し、

水面に、世界を想像する。みなも

星屑の流砂に、溶け込んで、

天球を見上げ、

星界の観測をし、

宙は変わらず見渡して、

流れ、揺らぎ、そうして産み生きていく。

時を刻む時刻と待つ。(生の心象風景)

人は

時を刻むもの。

刻むのをやめたとき。

それは死。

を持っている。

その感覚は、自覚。

それは

時刻とけいを待っている。

早く時を刻み止まってしまつもの。

しごとく動くもの。

早さの異なるもの。

様々。

を意味する。

人は、自ら悟るもの。

意味有るものは

長い時間を覚える。

時を感じない、気にする必要の無くなったもの。
もはや異なる存在のもの。

に意味は無い。

それは、 時を刻むもの。

時を刻むもの、時刻とけいを持っている。

した時、

を甘受する。

海のほし（星の心象風景）

塵の漂う宙に、集う雲。

星のかけらがその大地に、降注ぎ。

溶岩の輝く星の流動。

大地はだんだんと冷え、

水蒸気が水滴となって、

細かく砕かれた雫は、

天使の羽のように、

地上に舞い降りる。

大気中に舞う成分が、

自然界全ての元素が、

その中に溶かし込み、

空っぽの器の中に滴る。

ほんの少しの雨滴だとしても、

やがては、満たされ

それはたゆとう海になった。

マグマと水蒸気の星は、

陸と海を持つ新しい世界に、

変わっていた。

まどろむ海の中、

バクテリアウムは泡の夢を見て、

大気を満たし、
生命のスープは、
生まれていく……

海のほし(星の心象風景)(後書き)

雑学。

バクテリアウム

B a c t e r i u m

地球に酸素をもたらしたのは、彼らの仲間とされている。

バクテリア

複数形は B a c t e r i a

あおみどろの唄（泥の心象風景）

春の日差しは、暖かく。

野原を満たす、雪解けの水たまり。

まどろむ午後の昼下がり……

午後のマドロミ、あおみどろ。

青い空に、青い泥。

流れる泥に、あおいどろ。

風に揺らいだ、泥の中のおおみどろ。

泡に浮かんだ、夢の中のまどろみの。

すべては、どろの、みどりいろ。

どろどろ、とろけて、夢見泥。

泥にまみれた、青味泥。

青色を塗りたて、青塗あおみどろ。

どろに、どろどろ、とろけて、みどりどろ。

みどろの、どみろ、みどりいろ。

みどりの、みどろ、あおみどろ。

どろどろ、みどろ、ゆめのなか。

井みんむむじはあなむん。

無機物鉱石群（微の心象風景）

彩り豊かな生命の

赤、青、緑色のきれいな金糸の縫い目。

きらきら

きらきら

綺羅星のきらきら菌糸。

苔灰石のきらめくように
織毛の結晶体は
はがれる雲母。

白雲石の鋭いように
水に輝く大地は
うたう織毛。

ふさふさと

ふさふさと

白いふさふさの毛玉
ゆるる菌^{きんじ}枝は、金の枝。

忘れられた片隅のチーズの画布カンバスに

ひっそり暮らす芸術家の

とてもきれいなイシの

こどくなこころ

霰あられのいしのこころ。

からから、

からから、

機械ミシを奏ソウでる菌の意図。

無機物鉱石群（徹の心象風景）（後書き）

鉱石のきもち

長い時間をかけて、星の胎盤に育まれてきた鉱石たちの硬質的な世界観。

大地に植物のように生えて、生物のように自らの結晶を複製し増えていく鉱物。

言葉は要らない。無機物的に底にある世界が全ての事象。

人は、幻想したモノを実現させる力を持つ。(境の心象風景)

一つの世界として夢も現実も。
白と白の境界線しじまに描く界の端。
黒々と沈んでいく。

水に船を浮かべるだけで、そこは海となり、遠い世界への架け橋となる。

それが、桶の中という小さな小さな世界だったとしても。

空を飛ぶ夢を見て空を舞う箱を沈め。

そして、夜空の月を見上げては、そこへ到達する。

夢も現実も、世界。ひとつ。

黒と黒の平線くろくろの現す場の淵。

白々と浮かび上がる。

人は、想像したモノげんそうを創造じつげんさせる力を持っている。

白と黒に、深く落ちる灰燼のよどみ。

おぼろげな枠に。

しかし、空を見上げれば、月はいつもあるはずなのに。

空が玻璃ガラスに曇り、見上げてても映し出される映像に覆われて。

それは、身近にあるが、

しかし、あいたい時に、それはない。

すでに失って久しく、いつしかあったことさえ忘れていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2617q/>

人の中の事の象（詩の集）

2011年10月7日14時20分発行